

巻頭エッセイ

幼い子の言葉にはっとする

長野 ヒデ子



ながの ひでこ 1941年、愛媛県生まれ。絵本作家。「お
かあさんがおかあさんになった日」で産経児童出版文化
賞、「せとうちたいこさん」で日本絵本賞を受賞。絵本や紙
芝居等の作品が多数ある。「すすっはっはっこ・きゅ・
う」等、呼吸と声をテーマにした絵本は話題をよんでいる。

幼子の何げない言葉にハツとして、うれし
くなるのが良くある。

そばにいる幼い孫娘に弟が生まれ「私お姉
ちゃんになったよ、赤ちゃんかわいい！」と
大喜びしていたのに、赤ちゃんを抱っこして
寝ているママを見て、「おばあちゃんに赤ちゃ
んあげる。赤ちゃんはいらない。おばあちゃ
んとねんねすればいい」という。「そうねえ、
おばあちゃんが赤ちゃんもらって、一緒にね
んねしてもいいけど、おばあちゃんはおっぱ
いが出ないから、おなかがすいたらかわいそ
うでしょう。」と言うと、

「おばあちゃん、ひっぱれば？ きつとおっ
ぱい出るよ。がんばれば？」と真剣に私の顔
を見つめるのだ。その言葉に私も孫娘のパパ
である私の息子も、「ひっぱればかー！」と
大笑いして抱きしめた。けなげな孫娘、赤ちゃ
んにママをとられて必死で我慢していたの
ね。「ひっぱればー」はわすれられない言葉
になった。やっぱりおかあさんが一番よね。

そうそう、そう言えば昔うちの娘が三〜四
歳のころ、こんなことがあった。美しい満月
を見て、「お月さまきれいなええ〜♪でたで
た月が〜」とうたっていたら

「ねえ、おかあさん。アメリカにもお月さま
あるの？」と真剣なまなざしで聞くのである。
「あるわよ。アメリカからも見えるのよ」と

言うとき安心した顔でまた尋ねた。

「イギリスにもあるの？」「イギリスにもあ
るよ」

「じゃあインドは？」「もちろんインドもよ」
「ふーん」と納得した。「見える」というの
でなく「在る」のだということもなんだか嬉
しく感心した。子どもはそう思うのだなあ
と気づかされた。当時、娘はアメリカとイギ
リスとインドしか国の名前を知らなかったの
でそこで終ったのだが、世界中の国をもつ
知っていたらこの質問がまだ続いたかもしれ
ない。「お月さまを見て、そんなこと思うの
だねー」とほんわかしていたら、

「ねえ、おかあさん。みーんな、ひとつずつ
お月さまがあつてよかったねえ」とほっとし
た顔になってほほ笑んだ。「まあ！ なんて
いい事を言うのだろうー！」と幼い子の言葉が
いとおしくて、胸がいっぱいになってしまっ
たことがあった。「そうよ、お月さまはひと
つずつよね、人よりもつと欲しいと思うから
争いが起こるのだよね、お月さまに笑われる
なあ」と。幼い子どもの言葉にはっとするこ
とがいっぱいある。

その娘ももう直ぐ母親になる。幼い子とま
た向き合う時、此の事を思い出すだろうか。